



2005年5月1日 発行

2005年春号

<第4号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/山川宗計 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 E-mail: union@h9.dion.ne.jp

お笑いブーム

二十五年前のまんざいブームはよかった。「ツービート」や「やすし・きよし」や「B&B」や「ほしセントルイス」などはおもしろかった。ぼくはテレビで見えてました。大いに笑っていました。

ぼくが「ドリフ」を見ようとしたら、あねが「ひょうきん族」にまわっていました。ちなみにいかりやさんは、きよ年なくなりました。「ドリフ」と「ひょうきん族」の最終回を見たい。今は「あお木さやか」や「はたようく」や「ヒロシ」や「なんかいキャンディーズ」などがいて、今のお笑いブームもいい。

むかしのぼくはあかるかった。わらっていました。今のぼくはかんがえています。今はじさつが多く、さつばつとしたじけんなど多いです。むかしはいいのに、今はわるくなつたと思います。じしんもこわい。今は少しふあんですが、なんとかがんばつて生きたいと思います。

信本 浩二

ワークス匠たくみは今

豊かな経験を生かして

「ワークス匠」は、二〇〇三年四月一日に、就労支援を終えた人たちの施設として始まりました。

現在の利用者は、男女合わせて計十名、職員二名で作業をしています。利用者の平均年齢は四十四歳で、ワークスユニオンで一番高い年齢層の方々です。

小さな町工場や商店、学校や住宅が立ち並ぶ中に

「ワークス匠」はあります。

地域のお祭りや近所付き合いを大切に、ここ空堀町は、昔ながらの人のつながりのある町です。

「おはようございます。」

今日もよろしくね。」顔馴染みになった近所の取引先の方々から声を掛けられます。

「いい天気ですねえ」と世間話に花が咲くこともあり

ます。商品を引き取りに来た際に「いつもありがと」と

と言われ、とても誇らしげな表情をしている彼らの姿があります。地域に溶け込み、そして地域の人たちと共に仕事をしていると感じ

る瞬間です。

匠にはたくさん種類の仕事があります。その中からできるだけ一人一人の得意な作業を探し、取り組めるように努めています。

大きいサイズのポルトナットが好きな彼は、ポルトの仕事が入ってくると真っ先に「大きい？」と聞きま

す。大きいサイズが入った時には、一ケース全部彼に任せます。すると、いつも

は他人に頼っている彼が、重たいポルトを運び、すべて一人で準備をして作業に

取り掛かります。ふらつく彼を見て、誰かが手を貸そうとすると「い

い！」と強く拒否します。

「これは自分の仕事だ！」

という彼の強い責任感とプライドを感じます。周りから「できない」と思われ、世話を焼かれることが多い

彼ですが、「一人でできる」「やりたい」という気持ち

は、いつも人一倍強く持っているのでしょうか。この小さな彼の反発は、周りの人の意識を「できない」から

「できる」へ少しずつ変えています。

「ちゃんと薬飲まなあかんよ」と声をかけたり、支援

者が一人しかいないときに

は、「ここは大丈夫だから、向こう行ってええよ」と気遣ってくれます。そこには、

利用者や支援者という関係よりも、年上としてのやさしさや頼もしさを感じます。

年齢の分だけの人生経験があり、辛い事、悲しい事、悔しい事もたくさん経験し、

さまざまな想いを持っている彼らだからこそできる気遣いなのかもしれません。

そして昨年の夏、長年支え合いながら暮らしてきた

母親を亡くし、住み慣れた自宅からグループホームに引越した方がいます。

以前から洗濯や掃除などは自分でしていた彼女にと

って、グループホームで生活すること自体は、それほど

ど支障はありませんでした。しかし、日常生活の中で、ふとお母さんと生活していた頃を思い返し、いつも明るい笑顔の彼女が悲しげな

表情をみせることもありま

した。

そんな彼女を心配して、「お母さん亡くなってから、

少し痩せたんとちやいますか？」家の話せんとこうと思

思ってるん。思い出したら辛いやんかあ」という声が聞かれました。「私も将来は

お母さんいなくなるんやんなあ」と、共に働く仲間を

思いやる気持ちと、また同世代で同じように高齢の親を持つ彼らにとって、自分の

将来を考えるきっかけもなったようです。

彼らなりに考え、将来について不安を感じているこ

ともあるでしょう。しかし彼らにとって、「ワークス匠」は変わらずに存在する

場所であって欲しい。ここに来れば、仲間がいて、仕事があつて、自分の居場所がある。安心して生活できる一つの支えとなるような場所を彼らと共に作っていき

きたいと思えます。

(中谷・牧野光)



ひとりで立ちへのゆるやかな歩み

障害のゆえに、社会生活で多くの困難を抱える人々にとつて、家庭ほどの休まる場所は無いでしょう。しかし、いつまでもそこにどまることができない場合、少しずつ家族を離れて、自分だけの暮らしの準備を始めなければなりません。

「ワークスユニオンはどうして始まったのか」なんて、

そんな昔話を、いつまでも続けるつもりはないのですが、このことだけは、ぜひ書いておかなければなりません。それでは、最後に――。

つい昨年のことでした。

会員の三人の親御さんが、相次いで、それぞれお子さんとの水入らずの二人暮らしの半ばで、突然お亡くなりになりました。

たった一人取り残されて、頼るあてを失った三人のお子さんは、それぞれその日のうちに、心ならずも私どものグループホームへ居を移すことになりました。悲しみに追いつちを掛けられる様な、

つらい出来事だったに違いありません。

人生の悲劇は、時を選ばず突然襲ってくるものですが、それでも、その非情に打ち勝つためにも、生活はできるだけゆるやかに変わるものであつてほしい。しかし、彼らの転居は、緊急の庇護が必要であつたために、待つたなしのものでした。

昔から、入所施設がそうであるように、グループホームもまた、家族と生活できなくなつた人たちのためにあると考えられているようです。三人の場合も、そうでした。それぞれの親御さんは、自分の目が黒いうちは、一緒に暮らしたい、家庭で守つて

やりたいと思つておられたのでしよう。三人とも、親元を離れた、他人との生活体験はゼロでした。

親御さんの気持ちがかからないわけはありません。しかし、三人に限らず、親の目が黒いうちにこそ、親元を離れた、他人とのさまざまな生活体験が、彼らには必要ではないでしょうか。前もつてそれがあれば、三人の動揺はもつと少なくてすんだはずですが。もつとゆるやかな、無理のない「自立」への移行ができたはずですが。

グループホームは、元来、

障害をもつ人たちが「好きな所で好きな人と好きなように暮らす」、街の中の自前の生活共同体です。それは、必要なときにいつでも出入りができる、言うなれば別荘のようなものでしょう。ですから、家庭と比べてどちらかを選ぶ、「あれかこれか」ではなく、「あれもこれも」のぜいたくな二重生活であつて良いのです。行き来の自由な暮らしなのです。

「短期自立生活体験」とい

う、好きな時に好きな期間、好きな人と気軽にグループホームで生活できる独自のメニューを私たちは用意しています。昨年度は二十一名の会員が、あるときは一人(個室)で、あるときは親しい友だちと(二人部屋)、一年を通して交互に間断なく利用しました。

このプログラムの基本的な形は、四泊五日の共同生活を、一ヶ月に一度、一年にわたつて繰り返し行うもので、親元を離れて、その人なりの「自立」を少しずつ積み重ねてゆこうとするものです。

家族や親の温かい庇護の

下で暮らしてきた人が、そのきずなを断つて、他人の中で生きようと決意するのは、並たいていのことではないでしょう。一方、親にしても、いたいけな子どもを他人に託すのは忍びがたいことに違いありません。そこへ至るまでには、やはりそれなりのゆるやかな道すじが必要なのです。

手始めに、一ヶ月に一週間

だけ、親元を離れて他人と暮らし。まずは、それだけで十分。次に、それを数回繰り返した後、馴染んだところで、それぞれの能力に合わせた自立訓練プログラムを徐々に積み重ねてゆきます。ただし、訓練が目的なのではありません。結果はどうでも良いのです。要は、それに取組む過程で、彼ら自身が、家族とは異なる味方と同行者を見つけ、次第に「自立」への意欲と力をかき立ててゆきます。

実は、NPO法人を、この

企画を更に有効かつ安価に活用できるよう、私たちはこの冬に立ち上げました。これで、利用料がおおよそ半額になりました。家出をすすめるわけではありません。いつまでも家族と暮らすのも良いでしょう。しかし、世界はもつと広い。そして、人生はもつと長い。ですから、いろんな挑戦が、彼らにあつても良いのではありませんか。(山川)

新年度を迎えるにあたって

国の財政事情の悪化、本格的な少子高齢社会の到来などにより、われわれを取り巻く福祉環境は、大きく変わろうとしております。

設立時の「本人」・「親御さん」・「支援者」、それぞれの思いに裏打ちされ、山川が主導してきた、ワークスユニオンの七年間の歩みの方向性は、今後も不変のものであります。

しかし、そのアイデンティティを再確認すると共に、よりユニオンらしさをアレンジするために、本年度の重点課題は一年間に渡つての、「利用者・親御さん全員との個別面談」の実施と定めました。

ユニオンへの不満も含めて、自分は「こう在りたい、こう支援してほしい」。保護者として、「こう生活させたい、こう支援してほしい」との思いを忌憚無くお話し

ただき、今後のあるべき姿を描きたいと考えます。日程は後日ご連絡しますので、心づもりをお願いします。

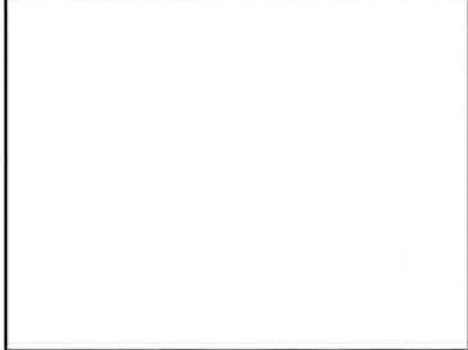
規模・支援者数ともに大きくくなり、それぞれの施設・個々の支援者に全責任を負わせる従来の体制ではうまく機能しなくなってきました。そこで本年度より、生活面(松川)・就業面(荒木)の両主任を配置し、組織として、各事業間の調整と、担当者のサポートができる体制を整えました。

今まで全額自己負担で実施してきた「短期自立生活体験」を、新しくNPO法人を立ち上げるにより支援費の「短期入所」としてリニューアルし、利用してもらいやすくしました。グループホーム(ユニオンVI)を新たに加え、利用者の定員も増加しています。

(南石)



職員紹介「ワークス匠」



なかや ゆり
中谷有里

静岡の温暖でのんびりした所で生まれ、故郷を離れて六年になります。ユニオンで一番昔が低い彼女ですが、子どもの頃もやはり、小さかったと言います。

中学校の教師である母から、ある時間いた「養学校」の話に興味を引かれ、大学では「福祉」(しかし母とは違う場所)と思いついたようです。ハンドボール部に所属し、初心者で、ほとんどゴールを決めていませんが、副キャプテンを任されています。

た。

ユニオンに来て三年目、利用者さんの気持ちに少しでも分かりたい、尊重したい、と話しています。今年度は「生活」の場で利用者さんとかかわります。

牧野光恵

去年の春、岡山の田んぼに別れを告げ、来阪しました。四人兄弟の長女として育った彼女にとって、温かい大家族と離れることはとても寂しかったようです。

大学時代は勉強よりボランティアに明け暮れました。中でも、不登校の子どもと友達になる「メンタルフレンド」の経験は、彼女の大きな財産です。いくつかの福祉施設を経てユニオンに出会いました。彼女は、一年前の面接時を思い返し、「天気の良い日だった。楽しく岡山の話をして帰った。」と話す、ユニオン一の楽道家でもあります。(牧野雅・内田)



編集後記

今号で取り上げました「ワークス匠」の皆さんは、就労支援後や就労を終えた人たちの施設として作られました。年齢が高く、若い人たちのベースとは違っても、自分のペースで仕事ができるように支援しています。匠の皆さんは無駄話もせず、黙々と作業をします。その姿勢は、熟練工としての貫録を感じさせられます。

以前、匠での一場面。あまりに皆が頑張つて仕事をするので、私が「もっとゆつくり仕事をしていいですよ」と、声をかけると、一人の方が「きちんとしなあかんねん。これが匠の仕事の仕方や、ルールやから」と逆に叱られてしまいました。

どのような仕事でも、自分の仕事や働く内容に対して、「誇りを持つ」ということの意義を深く考えさせられました。

年を重ねることは、マイナスにとらえがちですが、身体の機能に合わせて仕事内容が変わつても、「働きたい」という気持ち、いつまでも大切にできる支援をしたいものです。(荒木)